田んぼ2030プロジェクト
田んぼだより
第５号　2023年12月26日発行
田んぼの生物・文化多様性2030（略称:田んぼ2030）ニュースレター
発行:NPO法人ラムサール・ネットワーク日本（ラムネットJ）水田部会
所在地:〒110-0016東京都台東区台東1-12-11青木ビル3F
TEL/FAX:03-3834-6566 電子メール:info@ramnet-j.org
ホームページ:http://www.ramnet-j.org

目　次

■第6回生物の多様性を育む農業国際会議「ICEBA2023」　手塚 幸夫（房総野生生物研究所・いすみ市自然と共生する里づくり連絡協議会）・・1～2
■ICEBA７の徳島県小松島市誘致に向けてキックオフ　川合 厚平（生活協同組合コープ自然派しこく）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
■栃木県上三川町稲葉農園での田んぼ体験　畠山 未来（田んぼ2030）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3～4
■水田部会からのお知らせ・第6回ミニフォーラム（オンライン）の開催予定／編集後記 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

＊　＊　＊　＊　＊　＊

「第6回生物の多様性を育む農業国際会議 ICEBA2023」～トキと共生する佐渡の里山「新・生物多様性農業」～

報告　手塚 幸夫（房総野生生物研究所・いすみ市自然と共生する里づくり連絡協議会）

2023年11月18日（土）・19日（日）の両日に渡って、佐渡市において生物の多様性を育む農業国際会議（以下、ICEBAと略）が開催されました。両日の日程に従って、敬称略にて、概要を報告します。

【第1日目】11月18日（土）

（１）開会式

（２）鼎談「歴代 ICEBA を振り返る」

呉地正行（ラムサールネットワーク日本）、浅野正富（小山市長）、渡辺竜五（佐渡市長）

鼎談の前半は呉地氏と浅野市長からの報告で、これまで5回開催された歴代のICEBAを振り返り、その成果として生物多様性を基盤とした地域資源循環型の農業技術の確立とその国内および国際的な普及の実現を目指すための５つの具体的目標が設定されたこと（2018年いすみ宣言より）が紹介されました。これを受けて渡辺市長からは、次の10年ではSDGｓと脱炭素の取り組みを踏まえた「新生物多様性農業」を追求していくことが提示されました。

（３）基調講演「生物多様性保全・脱炭素に向けた農業」

過去20年の生物多様性の保全についてのとらえ方や扱われ方の分析が示され、それに重ねて食料事情や気候変動など環境・経済・社会の動向が解説されました。これまで生物多様性については生態系サービスをもたらすものすなわち人間生活を支える要因として扱われたり、貴重種や原生の自然の保護に注目が集まることがありましたが、ネイチャーポジティブ、農水省の生物多様性戦略、さらにはみどりの食料システム戦略を踏まえ、幅広くかつ相互の関係の中で考えることが必要なことが示されました。その上で生物多様性と気候変動を一体的に捉えること、さらに農林業と生物多様性の関係は食料システム全体の問題としてとらえることの重要性が指摘されました。

浅野氏・呉地氏・渡辺氏による鼎談と会場の様子

（４）情報提供

①「みどりの食料システム戦略と生物多様性を表示した農産物の流通」

久保牧衣子（農林水産省大臣官房バイオマス政策課・みどりの食料システム戦略グループ長）

②「脱炭素×生物多様性保全を目指して」

松本啓朗（環境省関東地方環境事務所長）

橋本氏の報告を受けるような形で両省の具体的な取り組みや将来に向けたアジェンダが紹介され、中身の濃い情報を得ることができました。

久保氏からは、2021年に発表されたみどりの食料システム戦略に加え、SDGｓ、CBD・COP15など社会的背景を受けて、今年3月に農林水産省生物多様性戦略が改定された経緯が説明されました。有機農業を推進していくとともに環境負荷の低減に向けた取り組みを強化していくことが明確な方針として示され、その上で生産者については取り組みが消費者にとっては情報が見える化することの重要性が示されました。

佐渡開会式（会場の様子）

懇親会での呉地氏

松本氏の報告は、地域における脱炭素の取り組みについて佐渡市を地域の取り組み事例として紹介した上で、先行事例を足場にして全国で展開していくことが呼びかけられました。そして、橋本氏と同様に気候変動対策（脱炭素）と生物多様性の保全を一体的に取り組むことが重要とし、その過程でネイチャーポジティブや30by30～自然共生サイトなどと関連付けて総合的に実現させていくことが重要と指摘しました。結びで、2010年COP10で提唱されたSATOYAMAイニシアティブを重ね合わせていくと述べたことは印象的でした。

（5）事例報告

①「環境にやさしい米づくりの実践」

山田 慎（佐渡農業協同組合営農振興部）

②「韓国の無償給食はなぜ実現できることになったのか？」

カン・ネヨン（韓国・慶熙大学教授）

③「持続可能な社会を目指す上での農業分野での取組」

近藤勝宏（パタゴニア日本支社・ディレクター）

④「中国塩城市の取組」動画放映

佐渡市からは、農業が直面する課題を解決する手段の1つとして環境保全型の米作りへの転換が進められ、さらに朱鷺と暮らす郷づくりの認証制度が作られた経緯が説明され、2017年からは自然栽培米への挑戦を「トキと共生する佐渡の里山」と合わせて進めていることが紹介されました。

カン・ネヨン氏からは、韓国の学校給食を中心に据えた公共調達という視点から有機農業の推進と生物多様性の保全再生をもたらす地域づくりの歴史が紹介されました。その中で、韓国が進めてきた親環境農業の施策を支える最大の柱が親環境給食であり、この取り組みを進めてくることができたのは市民の運動が土台となっていたこと、市民の運動に生産者や行政（自治体）、さらに教育関係者がネットワークを作り連携しながら進んできたからだとの説明がなされました。

近藤氏からは、環境に与える負荷を最小限に抑えると同時にビジネスを環境問題の解決に向けて展開するという企業の立ち上げからのポリシーに基づいて、regenerative organic（以下、ROと略）に取り組んでいること、さらにROの共同の取り組み例が紹介されました。　また、ICEBAに参画しているNPO・民間団体も支援を受けている「生物多様性・有機農業・食の変革に関する助成」についての案内もありました。

「中国塩城市の取組」は、人口が700万人を超える大都市における環境と調和するまちづくりについて動画での紹介がなされました。

（6）サイドイベントからの提案

佐渡市・豊岡市・小山市・大崎市の子ども交流事業として、生物多様性農業を見える化した田んぼアートでの稲刈り、その後の生きもの調査とそのまとめの様子を動画で紹介しました。

【第2日目】11月19日（日）

（1）分科会

分科会については、座長・パネリストを合わせ16名の発表やコメントがありました。人数も多くまた内容も多岐にわたるので分科会のタイトルと氏名・所属のみを列記するにとどめます。

①第1分科会「生物の多様性を育む農業のすすめ」

座長：呉地正行（日本雁を保護する会），パネリスト：舩橋玲二（NPO 田んぼ/大崎市）、茨木昭行（徳島県小松島市役所）、濱田栄治（(農)アグリスターオナガ/羽咋市）、佐々木邦基（農業者/佐渡市）

②第2分科会「地域再生農業（生物多様性と脱炭素）」

座長：藤野純一（(公財)地球環境戦略研究機構）、パネリスト：舘野廣幸（民間稲作研究所）、岸健二（コープ自然派事業連合）、木村純平（パタゴニア日本支社）、藤井絢子（菜の花プロジェクトネットワーク）、齋藤真一郎（齋藤農園/佐渡市）

③第3分科会「安全安心な農作物の提供」～生物多様性を育む農業を次世代に継承していく取組～

座長：斎藤順（新潟食料農業大学）、パネリスト：青山浩子（新潟食料農業大学）、手塚幸夫（いすみ市自然と共生する里づくり連絡協議会・房総野生生物研究所/千葉県）、山本隆之（兵庫県豊岡市役所）、中村長生氏(佐渡市農業政策課)・佐々木綾乃（農業・市民/佐渡市）

（2）分科会報告・閉会式

各分科会座長からの総括報告、次回　ICEBA開催地である小松島市の紹介を経て、最後に大会宣言が採択されました。宣言中に「脱炭素に資する地域再生農業の推進」、「田んぼと里山と生物多様性を伝える環境学習」、「人と生きものが共生する場としての里山の重要性」のフレーズが盛り込まれたことに感銘を覚えました。

（3）エクスカーション

「トキと共生する里山散策ツアー」が実施されました。

ICEBA７の徳島県小松島市誘致に向けてキックオフ　生活協同組合コープ自然派しこく　川合厚平

パネルディスカッション

生物の多様性を育む農業国際会議（ICEBA）の第７回開催を徳島県小松島市への誘致に向けて、会議運営サポートにあたっている「NPO法人ラムサール・ネットワーク日本」の方々と、小松島市・JA東とくしま・コープ自然派の関係者が集まり機運を高める機会と位置付けたイベントを10月28日（土）に徳島県小松島市で開催いたしました。

午前中は、小松島市内で有機資材を生産されている企業（㈱豊徳）の施設と、有機農業を学べる施設（NPOとくしま有機農業サポートセンター）を関係者で視察しました。

開会にあたって、小松島市の中山俊雄市長およびJA東とくしまの荒井義之組合長から地元を代表して挨拶をいただきました。

午後からの基調講演では、NPO法人ラムサール・ネットワーク日本より呉地正行元共同代表が田んぼの生物・文化多様性2030プロジェクトを紹介しながら田んぼの果たしている役割と重要性についてお話しくださいました。 続いて登壇したコープ自然派事業連合の岸健二理事長は、協同組合間協同による有機農業の可能性について、コープ自然派とJA東とくしまが小松島エリアで取り組んでいる「生産×消費」の事例を紹介し、ICEBA7に向けての問題提起を行いました。最後に地元農家代表としてJA東とくしま参与の西田聖さんがご自身の有機稲作との出会いのお話から、地域での広がりについて経過をご報告くださり基調講演を締めくくってくださいました。

第2部では、地域からの報告として、JA東とくしまより産直の取り組みと2012年から開催を続けているオーガニックエコフェスタについて報告。 小松島市からは、小松島市生物多様性農業推進協議会の浜田孝俊幹事長が無農薬米の学校給食への導入事例を含め協議会の取り組みを報告。コープ自然派より消費者の取り組みと有機農業サポートセンターの機能などについて報告。認定NPO法人とくしまコウノトリ基金より柴折史昭事務局長（理事）が徳島県鳴門市地域で取り組んでいる耕作放棄地をビオトープとして活用している事例やコウノトリの餌場となる巣塔周辺でネオニコチノイド系農薬を使用せず稲作を行う田んぼの取り組み紹介などコウノトリと農業の共生をめざした取り組みについて報告がありました。

第3部（パネルデスカッション）、NPO田んぼの舩橋玲二理事長がモデレーターを務め、滋賀県の「あいとうエコプラザ菜の花館」の園田由未子館長の他、基調講演や第2部でお話をいただいた皆さんをパネリストに小松島市でICEBAを開催するにあたってのテーマや環境・農業における課題について意見を述べた。特に中干しの弊害とメタンガスの抑制、田んぼの冬季湛水については、個々に考えを意見されました。

コープ自然派しこく 川合厚平氏　とくしまコウノトリ 基金柴折史昭氏

栃木県上三川町稲葉農園での田んぼ体験　田んぼ2030畠山未来

六月の田植えに続き、稲刈りの季節が到来、10月末の土曜日、興味津々で栃木県上三川町を訪れました。昔ながらの農機具を使った稲刈り作業の魅力と、田んぼに集う人々、周辺の生きものたちと共に存在することの素晴らしさを田園風景の中で楽しみ、感動する一日でした。

まず、6月に田植えし、今や黄金色の稲穂が一斉に頭を垂れる田んぼを前に、研究所のKさんを中心とした農家の方々から昔ながらの道具についての解説が行われました。 最初は、のこぎり状の鎌を使った手作業による稲刈りです。

稲刈りが始まると、手に鎌を取り、農家の方々の指導を受けながら稲穂を刈り取る作業に参加しました。驚くことに、最初はバッタやカエルを追いかけていた子供たちも、手作業にすんなりと馴染み、協力して作業に参加していました。 自分の手も切らないように気を付けながら、ザクッザクッと、手仕事ならではの感触を楽しみつつ、稲刈りを進めることができました。

刈り取った稲は束ねて天日干しをします。この日は、前もって乾かしてあった稲束を脱穀機にかけるという作業が行われました。 ペダルを足で踏みながらドラムを回転させ、脱穀します。その後、とうみと呼ばれる手回しの機械を使用して稲

ハザカケの説明

籾を選別する作業が始まりました。重たい籾・中くらいの籾・中身の入ってない軽いもみが見事に選別されていきます。速く回しすぎると遠くまで吹き飛んでしまいます。田んぼのメガネは水色メガネ・・・の童謡のリズムに合わせて回すとちょうどよいことが分かり、合唱も加わりました。 これらの手作業は機械作業とは異なり手間暇がかかりますが、機械の仕組みの説明を受け、なるほどと納得。機械への理解も深まる素晴らしい経験となりました。

一連の作業を終え、昼食の時間がやってきました。 田んぼのすぐ横でいただくランチは格別で、有機栽培で育った新米の美味しさに感動しました。特に、デザートの有機あずきの手作りあんこは、つきたての餅と相性抜群で、何度もお代わりをさせていただきました。食事の場で農家の方々との交流も深まり、皆さんの温かさ、優しさと、無農薬にこだわる心意気を感じることができました。

稲刈り体験の醍醐味は、田んぼの周りに生息する生き物たちとの共存が実感できることでした。 昼食の間にもカエルや昆虫や鳥たちが出没し、人間の営みと野生生物が調和する持続可能な農業の大切さを教えてくれました。

生きもの観察の指導もして下さったKさんの終わりの言葉、「今はスズメバチなどを人間の敵だから全滅させろというような乱暴な意見もよく聞かれるが、もともと多様な生きものがいるのが自然、ということをまず理解しなければと思います」を聞き、人間の自己中心的な在り方と勉強不足を反省させられました。

参加した子どもたちにとっては、無農薬の田んぼに安心して入り、周辺の生きものたちと触れあいながら自分の体を使って学ぶ貴重な体験となりました。田んぼは、私たちが自然との共生や環境保全の大切さだけではなく、農業文化も含め、楽しく学べる最適な場所だと思います。

足踏み回転式脱穀機小

あんころ餅おかわり下さい

バッタ見つけたけど脚が取れて

〈水田部会からのお知らせ〉

■第6回ミニフォーラム（オンライン）の開催予定

日程：2024年2月28日（木）18：30～20：00　　講師：福島大学／金子信博氏　内容：生物多様性と不耕起栽培

詳細は後日WEB・ML等でお知らせします。

［編集後記］

"We are prisoners of hope!"ケニアで自然保護活動をしている女性が国際会議で笑いながら発した言葉です。課題が多すぎて大変だけれど「希望に囚われた私たち」は、よりよい世界を目指して歩き続けるしかない。若い人々の活躍を目にする機会が増えたことは明るい兆し。それにしても懲役数十年は長すぎるような…　　安藤 よしの

※田んぼだよりへのご意見、活動情報等をラムサール・ネット ワーク日本事務局までお寄せください。
また、田んぼだよりをPDFファイルでのみ受け取りたいという方は、その旨事務局までお知らせくださるようお願いします。

全農　MS&AD MS&ADインシュアランスグループ　CO-OP コープデリ連合会 食卓を笑顔に、地域を豊かに。

田んぼ2030プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。
このニュースレターは、2023年度地球環境基金の助成を受けて作成しました。

Ramsar Network Japan
連絡先/事務局
ラムサール・ネットワーク日本
info@ramnet-j.org
TEL/FAX:03-3834-6566